魔法少女まりね☆マギカ

空雲雛太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まりね☆マギカ

【Ｎコード】
Ｎ２７５５Ｚ

【作者名】
空雲雛太

【あらすじ】
まず始めに断っておきたいことは、この物語は娯楽要素のない八つ当たりだということだ。原作のラストに納得できなかったにわかファンが駄々をこねているだけの駄作にして、原作のあらゆる全てを踏みにじる愚作。自分の望んだラストのために、登場するキャラクター全てを不幸にするだけのマイナス……故に、この作品は他の誰よりも原作ファンの方におすすめしない。
読めば必ず、原作の感動全てが台無しになってしまうから。（

※本当に原作ファンの方にはおすすめできません。何せ作者はマンガ版を読んだだけのにわか知識で書いているので、あなたの見たまどマギからだいぶズレています。クソゲーの類いが好きな方はどうぞ）

プロローグ（前書き）

「そーゆうのはね、よくあることさ
「自分の正しさを信じ込んで意固地になればなるほど「幸せって遠ざかっていくもんだよ「悔しいけどね」
「わたし、何かしてあげられないのかな…」
「そいつばっかりは他人が口突っ込んでも綺麗な解決にはならないねぇ」
「……」
「それでも解決したいかい？

「だったら間違えればいいのさ「正し過ぎるその子の分まで「誰かが間違えてあげればいい」

「間違える…？」
「そ。「ずるい嘘をついたり怖いものから逃げ出したり…「最初は理解してもらえないかもしれないけど「後になって正しかったと解る事もある「どうしても行き詰まったなら、いっそ間違えるのも手なんだよ
「■■■「あんたはいい子に育った「嘘もつかないし悪いこともしない「いつも正しくあろうと頑張ってる、子供としてはもう合格だ「だから大人になる前に上手な転び方を練習しておきな「大人になるとねぇ、プライドとか責任とか…「どんどん間違えるのが難しくなっちゃうんだから」

「……うん「ありがと、ママ…」

公式コミカライズ『魔法少女まどか☆マギカ』２巻第６話より

プロローグ

毬を蹴る音って知ってるかい？知らないだろうね、あたしだって知らないけど。そもそも毬自体を見たこともないしね。

まぁ今の世の中じゃ、知ってるやつのほうが少数派だろうさ。今に限った話じゃないけどね。

大昔には、毬を蹴るなんて娯楽はそもそも一般的な娯楽じゃなかった。

自分じゃ何もせず暇を持て余し、自分の食う飯一つに農民がどれだけ苦労したかを知らない貴族様の娯楽だった。

毬を蹴る音を知ってるってのは、昔なら無知の証明でしかない。今なら物好きの立証ってところかな。

けれど貴族は、自分達の糧となる不幸を知らなかったからこそ幸せいっぱいに暮らせたんだ。無知は罪でも罰でもなくて、救いだよ。

老若男女に人気の焼き肉だって、製肉過程を知らないほうが美味しくいただけるのさ。

『殺された命に感謝して食べろ』っていうあの言説も、考えてみれば独善的だよねぇ。あたしが殺された命なら、感謝されたってちっとも嬉しくないぜ。むしろ、よくも殺してくれたなと怨み言を連ねたい気分だろうさ。感謝はいいから未来を返せってね。

おぉっといけない、話が脱線しちゃったよ。話が四方八方に四散するのはあたしの悪く癖だぜ。まぁつまり要するに何が言いたかったかと言うとだね。

いいかい毬音、あんたは無知でありなさい。傲慢な知であるよりも、幸せな無知でありなさい。

他人の苦しみなんか見ちゃいけないよ。そんなもんは、お前を殺す毒でしかないからね。

名前のせいで（前書き）

「うーん「リボン「どっちにしよう」
「こっち」
「…派手じゃない？」
「それくらいが丁度いいよ「これで■■■もモテモテだな」
「もう、ママ！からかわないでよ！」
「ホントホント」

◇

「じゃ、行ってくるわ」
「いってらっしゃい「■■■ももう行かないと」
「うん「行ってきます！」

◇

「ごめんっ！さやかちゃん、仁美ちゃん！」
「おーっ、きたきた「遅いぞ■■■」
「■■■さんおはようございます」
「あれ、リボン変えたんだ？」
「派手じゃない？」
「とっても素敵ですわ」
「ほほう？イメチェンして仁美みたいにモテようってのかこいつめぇ！」
「ちっちがうよっ」
「そんな子はあたしが嫁にもらってやる！」
「ええ！？
「ふ…二人とも！始業時間が！」
「うわっやばっ！」

公式コミカライズ『魔法少女まどか☆マギカ』1巻第1話より
一部修正

名前のせいで

母が夢に出てきました。
両親が死んで3日が経つけど、未だにどういう心境であるべきかがわかりません。
悲しむべきなんでしょうし悲しみたいのですけど、母があれだと素直に悲しめません。悲しいと認めたら、夢枕で1週間はからかわれる気もしますし。
父は優しい人でしたし（ その性格ゆえに、よく母に振り回されていた ）、こっちは普通に悲しいですが、母の死を悲しめない以上、父の死を悲しむのはこう……フェアじゃありません。
死因は交通事故でした。
どちらかといえばありふれていると思われます。
ありふれた日常の中で、ありふれた（？）理由からありふれた（嘘）両親を失う。
それはあまりにも唐突なことで、正直未だに実感がわきません。
母とか特に死ななそうですし。
「いってきまーす」
「……」
「いってきまーす！」
「……」
「いってきまーす！！」
「はいはい、そんな大きな声を出さなくても聞こえてますよ」
「ダウト！」
「いってらっしゃい。気をつけてね」
やっぱり聞こえてないっぽいです。

両親を失った私は、ここ見滝原市の祖母の家に身を寄せていました。祖父は私が生まれる前に他界したと聞いています。死んでばか

りな私の家族です。
生前の父に『何かあったら行ってくれ』と頼まれていたし、身内が他になかったのでここに来ました。『何かあったら』とは、実は私のことではなく祖母のことなのですが。
祖母は少々難聴（少々……？）気味で、大きな声を出さないとコミュニケーションが取れないという重大な欠点を抱えているのです。何で補聴器を着けないのでしょう……？
「道は……こっちで合ってましたっけ？」
家を出た私が目指しているのは、今日から私の通うことになる見滝原中学校。歴史ある伝統校ですが、最近改装したとのことで、すごくおしゃれな外観の学校でした。
転校の手続きのために一度訪れてはいるのですけど、新生活への緊張からか、いまいち自分の記憶に自信が持てません。
「……困りました」
このままでは遅刻してしまいます。転校早々不良さんデビューしてしまいます。それは嫌です。かといって、周りの人に道を聞くのに勇気が……
「……なんて言っていられませんよね」
周りには私と同じ制服の人が……私の通うことになった見滝原中学校の生徒の姿がちらほらと見受けられます。皆さんに聞けば確実な上に、上手くいけば転校初日からお友達が出来てしまいます。我ながらなんて妙策……私の前世は諸葛孔明だったのではないでしょうか。
「あの……すみません」
とりあえず2人以上で登校している生徒に話しかける勇気はないので、ぼっちで登校している優しそうな人に声をかけます。
「はい？何かしら？」
『優しさ』を表情で表したような笑顔で、ぼっちさんが私に応えます。
綺麗な金色の髪を2つのチョココロネみたいに束ね、とても羨ま

しい胸部を持つその女性に、私は意を決して質問をしました。
「あの、私！本日付で見滝原中学校に転校してきた、築地　毬音と申します。お恥ずかしい話なのですけど道順に自信が無いので、もしよろしければぼっちさんとご一緒させて頂きたいのですが……」
噛まずに言えました！我ながら芥川賞を狙えるくらいの名文でしたね！
「……えと、ぼっちさんってもしかして私のことかしら……」
しまりました。
名前を知らなかったとはいえ、うっかり心の中の呼称をそのまま使用してしまいました。こんなことだからあの母に『年始めの空っぽ郵便ポスト』なんて不名誉極まりないあだ名を付けられるのです。
「いえその弁解させてください釈明させてください！あの悪気はなかったんです口が勝手にっていうかそのえぇとそう！これはきっと悪い魔女の仕業です！気付かないうちに悪い魔女の口づけを受けてそれで……」
「悪いことをしたら？「ごめんなさいぃぃぃ！！」よく出来ました♪」
転校して最初の土下座です。初土下座記念日といったところでしょうか。そんな記念日は嫌です。何を記念しているのですか私は。
「ほら、頭をあげて？年頃の女の子が往来で土下座なんかしちゃダメよ」
かがんで私に目線を近づけ、優しく微笑んでそう言ってくれるチョココロネさん。この体勢だとちょうどコロネさんのパンツが見え
「ちょっ、どうしたの！？何で急に地面に頭を打ち付け始めたの！？」謝罪している身でどこを見ているのでしょうか私は。万死に値します。
「何もそこまで自虐的にならなくてもいいでしょう？私もそんなに気にしてないから……」
「……許して、くれるのですか？」
「えぇ、もちろん」

「ぼっちさん呼ばわりも謝罪中にパンツを見たことも許して下さるのですか、コロネさん！」
「パ……ッ！？」
顔を真っ赤にしてスカートの裾を掴むコロネさん。物理的にも心理的にも距離が出来てしまいました。
「そういうことならもっと誠意を込めて謝って！」
「ごめんなさいいいいいい！！」
日本土下座大会とかあったら、全国大会を狙えるくらいの土下座だったと思います。

◇

「……巴　マミよ」
5分ほど謝り倒してようやく許してもらい、結局一緒に登校して下さった人（　いい人です　）は、警戒心に彩られた表情のままではありましたがそう名乗ってくれました。
「巴さんですか。素敵なお名前です」
「そんな取って付けたみたいに誉めて頂かなくて結構です！」
すっかり嫌われてしまいました。まぁあんな一幕のすぐ後にフランクに接されてもそれはそれで困りますけど。難しいところです。
「いえ、本当に羨ましいです。……名字が築地で名前が毬音って、母の悪意を感じます」
「そんな風に言っちゃダメよ築地さん。あなたの『毬音』っていうお名前にも、ご両親の願いが込められているんだから」
「……この名前に込められた願いって『幸せな無知であれ』ですよ？」
「……き、きっと直接本人に言うのが恥ずかしかったのよ！だから照れ隠しにそんな由来にしたんだと思うわ！」
さっきまで警戒していた相手を慰める巴さん。やっぱりいい人です。何でぼっちで登校しているのかがわかりません。

「あっ、見えてきたわ！あれが、今日からあなたの通う学校……三滝原中学よ」
「改めて見ても、やっぱりおしゃれですねぇー……。前に私のいた学校なんか、床も壁も天井もぜーんぶ木張りでしたよ」
「それはそれでかなり特殊だと思うけど……」
困ったような笑顔を浮かべる巴さん。最初の警戒心はすっかり消え失せているようです。……いや警戒心は私が植え付けたんですが。
校門をくぐり、昇降口に足を向けたあたりで、初日は来客用の玄関からくるように言われていたのを思い出しました。
「巴さん、ありがとうございました。ここまでで大丈夫です」
「そう？でも昇降口までは一緒なんだし、遠慮しなくていいのよ？」
さっきまで警戒していた相手にそんなことが言えるなんて、優し過ぎますよ巴さん。惚れちゃいそうです。
「いえ、私ももう少し巴さんとお話したいのですけど、初日は来客用の玄関からくるように言われているもので……」
「あら、そうだったの。じゃあ仕方ないわね。慣れるまで大変だと思うけど、頑張ってね」
いけません、この流れで別れてしまっては、せっかく訪れた友達を作るチャンスを逃してしまいます。巴さんはすごくいい人ですし、なんとかして明日に繋げたいところです。
「あの、巴さん！」
「？　どうしたの、築地さん」
「もしよろしければ、明日待ち合わせをして一緒に登校しませんか！？」
「ふぇっ！？」
再び顔を真っ赤にする巴さん。な、何でしょう……今朝のことを思い出して警戒しているのでしょうか？
「い……一緒に登校……！？あれって都市伝説じゃなかったの！？」
「通学路にもけっこういましたよ！？」
巴さんには世界がどんな風に見えているのでしょう。その生い立

ちには興味が尽きませんけど、今は登校の約束です。うかうかしてたら、他の人にとられちゃいます！
「巴さん……友達って、『なろう』って言ってなるものじゃないと思うんです……。友達って！気が付いたらなっているものだと思うんですよ！」
「ッ！！」
巴さんは私のただならぬ気迫に呑まれているようです。ここが正念場です！周囲の奇異の目を無視して、巴さんを口説き落とすことに集中します。
「それは私たちもしかり！短い登校時間ではありましたが、その中で私たちには！いつの間にか友情が芽生えていたのです！」
「そ……そうだったの……！？」
……違う気がしてきました。少なくとも友情って、こんな形で結ばれるものではなかったような気がします。友情に対する幻想とかならいいのですけど……。
「そうだったのです！もうぼっちなんかじゃありません！」
「私は最初からぼっちじゃないわよ！」
意外な反撃を受けました。つまり巴さんには、すでにお友達がいらっしゃると？
「えぇ、その通りよ。自慢になってしまうかもしれないけど、私には友達が3人もいるわ！」
「なっ……なんですってぇぇぇぇぇぇ！？」
い……意外過ぎます！！1人で登校していたから、完全に油断していました！3人もお友達がいらっしゃるなんて……！私は……私は、とてつもない人に声をかけてしまいました！
「で、でも何で……！？何故それほどのお人が1人で登校してらっしゃるのですか！？」
「だ、だって……佐倉さんは学校が違うし、暁美さんはなんだか人を寄せ付けない感じだし……美樹さんは……」
もにょもにょ言っているようにしか聞こえませんでしたが、お友

達の名前らしき単語は聞こえました。
それと、最後のほうに見せた悲しげな表情。日だまりのような巴さんに似つかわしくない、暗い影を纏った印象的な表情でした。まるで、もう誰かとは会えなくなってしまったみたいな……転校してしまったのでしょうか？
羨ましいですねぇ。私もこんな風に、転校を悲しんでくれる友達がほしいです。
「よく聞こえませんでしたけど、そのお友達とは登下校を一緒にならないんですね？」
「まぁ、そうね……一緒に行動するのって、本当に魔獣退治の時くらいじゃないかしら……」
「……まじゅう？」
「あ……っ！な、何でもないわ、気にしないで！」
「えー、そんなこと言われたら余計気になりますよー。まじゅうって何なんですか！？」
「な……何でもないってばぁー！」
昇降口に逃げる巴さんを追いかけます。とても楽しくて、新生活への期待が膨らむ朝の一幕でした。
だから、巴さんを追いかけたせいで遅刻しかけて怒られたことにも後悔はありません。ありませんとも。

◇

「皆さん、今日は先生から大事なお話があります。心して聞くように」
たっぷり怒られたあと、私は自分の入るクラスの担任の先生に連れられて教室の前で待っていました。
先生が『転校生を紹介します』とおっしゃったら教室に入ることになっていますが、ちょっとものものし過ぎませんか……？そんな

心して聞くほどの話題にはなれませんよ？

「いいですか！？女子の皆さんはゆで玉子のゆで加減にケチをつけるような男とは付き合わないように！！そして男子の皆さんは！くれぐれもそんな大人にならないように！！」

ただの八つ当たりでした！

ゆで玉子のゆで加減にこだわりでもあるのでしょうか……？それくらいのわがままなら聞いてあげてもいいのではと思ってしまうのですが。

「先生が言いたいのは……それだけです……」

それだけなんですか！？転校生の紹介とか無いのですか！？私はどのタイミングで入ったらいいのでしょうか！

「あー、あと転校生を紹介しまーす」

転校生の優先度はゆで玉子以下ですか！？うぬぼれた発言かもしれませんけど、私の話題のほうが重要なのでは！？

「毬音さん、入ってらっしゃい」

さっきの剣幕が嘘だったみたいに穏やかな声。できればせめて名字で呼んでほしかったのですが……まぁ、前もって言っておかなかった私の責任ですね。

はやる鼓動を抑え、教室のドアに手をかけます。

「――――ッ」

目。

教室中の全ての目が、私に向けられています。自分の空気と教室の雰囲気のズレを肌で感じます。

怖い――――。

馴染めなかったらどうしよう――――。
受け入れてもらえなかったらどうしよう――――。
恐怖で塗り潰された頭をフル回転させ、巴さんを探しますが見当たりません。そりゃそうです。巴さんが同じクラスである保証なんてどこにもありませんでした。私は何を浮かれていたのでしょう。
思わず一歩、下がってしまいます。途端にクラス内に散らばっている瞳に数多の色が宿ります。
同情――――憐憫――――失望――――。
引いちゃいけない。その瞳の色を見てギリギリそう思い直し、教室に足を踏み入れ――――
「あっ！」
緊張でおぼつかない足が、存在しない何かにつまずいて転んでしまいます。倒れるとともに教室のどこかで失笑が起こりました。
「あらあら、緊張しちゃっているのね。大丈夫よ、落ち着いて」
何が大丈夫なの？落ち着いてって何？
先生の優しささえ敵に見えるほどの惨めさに支配され、1分にも満たないわずかの時間で、私はすっかりひねくれて、いじけてしまいました。
完璧に孤立した。みんなが私を嘲笑っている。ここにも、私の居場所は――――
「……立ちなさい」
凛とした声とともに、綺麗な右手が差し出されました。顔をあげると、そこには――――とても同世代とは思えない大人びた女の子が、私に手を差し伸べていました。
私のひねくれなんて中二病の延長でしかないと悟らされる深い瞳に、明かりのない夜のような黒の、腰までありそうな長い髪。その人は、1人だけ時間軸がズレているみたいに、異質なくらい完成された雰囲気を持っていて――――。それだけに、赤いリボンで結わえ

られたツインテールがとてもミスマッチでした。
「えと……ありがとう、ございます」
「どういたしまして」
淡々と返されてしまいました。私、また何か失言してしまったでしょうか……。
「間違えたのなら、やり直しなさい。諦めないで、何度でもね」
先人からのアドバイスよ。そう言い残して、彼女はさっさと自分の席に戻ってしまいました。最後まで淡々とした人でしたね……。こう言っちゃうと失礼ではありますけど、あまり他人に親切にするタイプの人にも見えませんし、そんなものかもしれません。
「ありがとね、ほむらさん。出来た生徒が持てて、先生も鼻が高いわ」　本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる先生。さながら我が子を自慢する親バカ母さんみたいです。……誉め言葉ですよ？
しかしあの人、ほむらさんって言うんですね……。やっぱりかっこいい人は名前もかっこいいです。私もあんな風になりたいですねー。まず無理でしょうけど。
「さて、それじゃ毬音さん、自己紹介をしてちょうだい！」
先生に促され、自分が転校生だったことを思い出します。間違えたのならやり直せ……か。よし！
「先生、すみません。教室に入るところからやり直しちゃ駄目ですか！？」
「……へ？」
呆然とする先生を横目に、私は入り口まで戻って再度スタンバイ。戸は開けたままですが。「……えーと……じゃあ毬音さん、入ってらっしゃい」
「はいっ！」
リテイクに応じてくれました。この学校はいい人ばっかりです。
改めて中に入り、黒板に自分の名前を書いたあとで、私はもう一

度さっきの景色に目を向けます。
知らない人ばかりの、知らない教室で。
新たな自分を、始めるために。

「築地　毬音です！名前のせいで、料理のほうのマリネが若干嫌いです。よろしくお願いします！」

それが君の祈りかい？（前書き）

「ちょっとちょっとー、何やってんのアンタ達
「あれ使い魔だよ？「グリーフシード持ってる訳ないじゃん？」
「魔法少女？」
「やっぱり来たね杏子」
「あっ、逃げちゃう！」
「追わなきゃ…「！！」
「だからやめろっつーの」
「何すんの！？あれ放っといたら誰かが殺され…」
「当たり前だろ？
「四、五人喰わせて魔女にすりゃあ「グリーフシードも孕むのにさあ
「卵産む前のニワトリ締めてどーすんの？」
「な…あんた、魔女に襲われる人達を見殺しにする気！？」
「…なんかさぁ、大元から勘違いしてるよねぇアンタ？
「弱い人間を魔女が喰う「その魔女をアタシ達が喰う「それが当たり前のルールでしょ？「ガッコーで習ったよねぇ食物連鎖ってやつ？
「まさかとは思うけど…人助けだの正義だの、そんな冗談かます為に「契約交わしたわけじゃないよねぇ？」

公式コミカライズ『魔法少女まどか☆マギカ』2巻第5話より

それが君の祈りかい？

「あの……築地さん」
「ほわぁっ！？」
転校初日最初の休み時間。まさか声をかけていただけるとは思っていなかったので、かなりビビりました。連鎖的に、相手もびっくりしていましたが。２連鎖って、おじゃまぷよをいくつ降らせるんでしょう。
「えっと……驚かせてしまってごめんなさい、築地さん。あなたにどうしてもお聞きしたいことがありましたので……」
「聞きたいこと……ですか？」
「はい。……こんな子を探しているのですけど、どこかで見かけたことはございませんか？」
そう言いながら、一枚の紙を取り出す女生徒さん。なんか言動に気品が満ち溢れた人ですね……。お嬢様のイメージを体現したみたいな人です。ちなみに巴さんのイメージは『優しいお母さん』です。
「美樹……さやか、さん？」
「……はい。何かご存知ありませんか？」
「うーん……ちょっとわかりませんねぇ……」
「……そうですか」
渡された紙には『探してます』の文字と、快活そうな女の子の写真。これってまさか……
「……行方不明ですか？」
「はい……少し前から家に帰ってないらしくて……。警察の方が捜してくださっているのですけど……」
そう言って、しゅんとしてしまうお嬢様。美樹さん……なんだか聞き覚えのあるような名字ですけど……。
「あ、巴さんだ」
「？　その方がどうかなさいましたか？」

「いえ、今朝お友達になった人なんですけど、その巴さんのお友達のお名前に似たような名字があったなー、って思いまして」
まぁ、はっきりそうと聞いたわけではないですけど。
「さやかさんのお知り合いの方でしょうか……？解りました、その方にもお聞きしてみます」
「聞き間違いとかだったらごめんなさい……」
何しろもにょもにょ言ってる中からサルベージしたので、自分がいい加減なことを言ってやしないか不安です。
「いえ、今は藁をも掴みたい気持ちですので。協力しようとして下さるだけでありがたいですわ」
『ですわ』って言う人初めて見ました。この人は生粋のお嬢様なようです。
「ではっ、他に協力できることがありましたらお申し付け下さいです！」
「では、さやかさんを見かけましたらご一報ください。失礼します」
深々とお辞儀をして自分の席に戻るお嬢様。次の時間の準備をしているようです。どれどれ、私も準備しますか。
「あの、すみません。まだ教科書がないので、見せていただいていいですか？」
「……構わないわ」
「他の時間もお願いしたいのですけど……」
「ええ、どうぞ」
「……」
「……」
「……」
「……何？」
「いえ、あはは……」
相変わらず永久凍土な暁美さんです。やっぱり、何か失言してしまったのでしょうか……。この際むしろ、失言が原因であってほしいです。

◇

「や……やっと終わりました……！」

今日最後の授業が終わり、やっと解放された気分になります。転校による範囲ボケ（　私のいた学校とやってる範囲が違います！　）の疲労もありますが、一番はほむらさんの教科書を見せていただいていたことでしょう。

彼女の持つ雰囲気というか、そういうものに気圧されての授業はかなりしんどかったです。会話も無いし無表情だし……話しかけても一言か二言で終わってしまって続かないのです。やっぱり嫌われているのでしょうか……？

「……とりあえず巴さんを探して、一緒に下校してもらいましょう……」

なんか今は、無性に巴さんの笑顔が見たいです。たぶんあの人には癒し効果があります。マイナスイオンな巴さんです。

教室を出て、巴さん捜しの旅に出ます。

「あり？」

廊下に出ると隣の教室の入り口に、今朝がた見かけた金髪のコロネが見えました。あれってもしかして……

「……巴さんですか？」

「あっ！つ、築地さん！」

「……？」

なんか声がうわずってますね。心なしか顔が赤い気もしますし、どうしたんでしょう。

「この教室の人にご用ですか？」

「い、いえ。そうじゃないけど……」

「……？？」

どうも煮え切らないですね……。まぁいいです。言いたくないことを無理に聞くつもりもないので。それより、せっかく探す手間が

省けましたし、下校のお誘いをしましょう。
「あの、巴さん」
「えっ！？あ、なっ何かしら築地さん？」
「……えと」
「？　どうしたの？」
「……その」
「……？」
て、照れくさいです！なんか告白の現場みたいな空気が漂い始めています！ていうか、我ながら友達耐性無さすぎですよ！ミッションは一言『一緒に帰りませんか？』と聞くだけですよ！？こんなピンク色の空気になる要素皆無ですよ！
まずいです、このままではキーワード欄に『百合』の単語を加える羽目になってしまいます。それはちょっと嫌です、私はノーマルです！大丈夫、聞くのなんか一瞬です。言ってしまえば何でこんなに恥ずかしがっていたのかわからなくなるに決まってます。『一緒に帰りませんか？』と一言聞くだけ、決してインポッシブルなミッションではありません！

「「あのっ！！」」

シンクロ率１００％、余計恥ずかしくなりました。もうトム・クルーズさんを連れてくる以外の解決策が見当たりません。
しかし息ピッタリでしたねぇ……もしかしたら巴さんも下校のお誘いを試みているのかもしれません。
そんな期待とともに、巴さんを見てみると、目を潤ませながらお顔を真っ赤にしていました。目が合うと、お互いすぐに視線を反らします。たぶん私も、同じような顔をしていたんでしょうねぇ……。なんか今なら、巴さんが何を考えているのかが全部わかる気がします。
何かこの状況を打破するカードがないか探してみると、私の後ろ

に、なぜか幸せオーラ全開の弛みきった表情をしたお嬢様を発見しました。水没に藁です！！……『渡りに舟』が正しいんでしたっけ？

「と、巴さん！そういえばあちらのお嬢様が、巴さんにお聞きしたいことがあるって！」

「そ、そう？じゃあ声をかけてみましょうか！」

ぎこちないのはお互い承知です。

「こんにちは。築地さんから聞いたんだけど、私に聞きたいことって？」

さすがに友達を3人も持つ女性は違います。知らない人にああも自然に声がかけられるなんて……。

なんとか持ち直しそうな空気は、しかしお嬢様の返答で一気に台無しになりました。

「あら、私のことはお気になさらず……。私にはお二人の禁断の愛を邪魔するつもりはございませんわ……！」

「……ぇっ！？」

「ストップです廊下の皆さん！少し落ち着きましょう、私たちの間には何か誤解があります！」

ファインプレイです私。危うく次の学級新聞の一面を飾ってしまうところでした。

「誤解……まさか！すでに婚約まで！？」

「何でそうなるの！？」

「校内での携帯電話の使用は禁止ですよ！メールも電話も止めて下さいお願いします！」

「大丈夫ですわ築地さん。私だけはお二人の恋を応援します！」

「ちょっと黙りやがれです腐りお嬢様！！」

「築地さん！まずみんなの誤解を解きましょう！」

◇

「それで、私に聞きたいことって？」
お嬢様ショックを鎮め終えたあと、巴さんは何事もなかったかのようにお嬢様との会話を再開しました。これが友達を3人も持つ人の対人スキルですか……！やはり格が違います！
「あっ、はい。先輩はさやかさん……美樹さやかさんのお知り合いだとお聞きしましたので、彼女について何かご存知ないかと思いまして……」
美樹さやか。
その名前を耳にした瞬間、再び巴さんの表情が曇ります。
「……ごめんなさい。何も知らないわ」
「……いえ、こちらこそ。では、何かあったらご連絡下さい」
そう言って一礼すると、百合趣味の腐譲さまは階段へ向かって行きました。
「……巴さんって巴先輩だったんですか？」
「えっ？あぁ、そういえば、学年を教えてなかったわね。えぇ、私は三年よ」
「そうだったんですか！？」
衝撃の事実発覚です！てことは、私は先輩のことをぼっちさんとかコロネさんとか呼んでたってことですか！？
「……でも、何で先輩は私が2年生だってわかったんですか？教えてなかったのは私も同じなのに……」
「二年生に転入生が来たらしいって噂は、私にも届いていたわよ。あと、別に呼び方も変えなくていいわ。今まで通り呼んで頂戴」
そう言ってにっこり微笑む巴さん。うん、やっぱり巴さんにはこういう表情がよく似合います。
「それじゃ、帰りましょう築地さん」
「あ、はい！」
先に言われてしまいました。なんか負けたみたいで悔しいので、反撃を試みます。

「ところで巴さん。一緒に帰るなら、せっかくですし寄り道しませんか？」
「本当！？じゃあおすすめの喫茶店があるから、そこに行きましょう！」
普通に喜ばれました。正直照れて真っ赤になる巴さんを期待していたので、反撃失敗ですかね……。
でもまぁ、巴さんの幸せそうな笑顔が見れましたから、やっぱりちょっと得した気分です。

◇

「築地さん、転入初日はどうだった？」
喫茶店へ向かう途中、目的のお店の話題が落ち着いたあたりで、巴さんが私にそんな質問を投げかけました。
「……とりあえず、転入生の紹介よりゆで卵の話題が優先されるとは思いませんでした……。」
「……ゆで卵？」
「はい、担任の先生が『ゆで卵のゆで加減にケチをつける男とは付き合うなー』とか……」
「……まただめだったのね……」
「また！？」
前にもこんなことが！？
「聞いた話だと、他には卵の焼き加減とか卵の白身がどうとか……目玉焼きか卵焼きかで破局したこともあったかしら」
「卵に呪われてるとしか思えない男性遍歴！！」
ご先祖様が卵を粗末に扱ったりしたんでしょうか。あまりにも謎過ぎます。
「あとは……そうそう！私のクラスにすっごくかっこいい女性がいらっしゃるんですよ！」
「……中学生に『女性』って……」

でも私には、あの完成度の人を女の子とは呼べません。
「なんか1人だけ違う時間を生きてるみた「あぁ、暁美さんのことだったのね」いって情報だけで特定できるんですねやっぱり！」
3年生にまで知れ渡っているとは……。さすが暁美さんです。
「確かに暁美さんは三年生の間でも有名だけど……」

唐突に紅が降ってきました。

身を包む衣、落下の軌跡と戯れる髪。その全てが、それこそ焔のような紅。それが人だと理解する頃、紅の人が忌々しげに呟きます。
「ちっ……囲まれちまったか」
「へっ？」
反射的に辺りを見回すと、そこには黒。

黒黒

おびただしい数の黒い何かが。見渡す限りに湧いて出てきます。
「と……と、とととととと巴さん……！！」
「魔獣……っ！？何よこの数！」
「おっマミ！ちょうど良かっ……って一般人連れかよ！？」
あれ！？赤い人はともかく巴さんも結構冷静です！？もしかしてこーいうことって、見滝原では日常茶飯事なのでしょうか！？
「いや、ただの一般人というわけでもなさそうだよ杏子。この子に

はどうやら素質があるみたいだ」
今度は喋る白いぬいぐるみです！？もう私には見滝原という町がわかりません！！
「僕はぬいぐるみじゃな「心を読まれました！？このぬいぐるみさんにはプライバシーに対する意識が欠如しています！」いや、まず落ち着「よく見るとなんかえっちぃ感じがしますねこのぬいぐるみさんは！白とピンクの配色がなんかえっちぃです！」いいから僕の話を聞いてよ毬音「名前まで抑えられてます！このままでは私はいやらしい犯罪に巻き込まれてしまうかもしれません！そうなる前にくたばりやがれで「まずはあんたが黙れ！」
赤い人が槍の持つところで叩いてきました！さてはこの赤い人もグルですかっ！
「はい、深呼吸してー」
「すー、はー。すー、はー。」
巴さんに言われるがままに深呼吸します。……なんか保母さんにあやされる子供の気分です。
「佐倉さん、まずは築地さんを安全なところへ！」
「わかってる！」
あれ、なんか赤い人と巴さんが親しげです。てことは、悪い人たちではないんですかね？
「でも逃げようにも、周りはあの黒いのでいっぱいですよ？」
「あたしがあいつら抑えるから、マミは退路を確保してくれ！一旦体勢を立て直す！」
「任せて！」
そんなやり取りの中で、巴さんは何か宝石のようなものを取り出して構えます。すると、宝石が輝き光が巴さんを包み、あっという間にファンタジーな服装に変化しました。
「彼女たちは魔法少女。今僕らを囲む魔獣と戦う者さ」
触り心地の良さそうなぬいぐるみさんが、私の疑問に解を示してくれます。……どうでもいいですけど、その耳から生えてるのは何

なんですか？
「ティロ・フィナーレッ！！」
巴さんが叫ぶと、現れ出でた大きな銃からいかにも必殺技な一撃が放たれ、黒い壁に大穴を空けます。
「あそこから出るぞ！」
赤い人の号令で駆け出す私た……って速ぁ！？もう外まで走り抜けちゃいました！？
「うわわわわわ！」
なんか黒いの（魔獣でしたっけ？）が夕立みたいに降ってきます。もしかしてこれ……デッドエンドですか？
「掴まって、築地さんっ！」
目の前に伸びてきた蔦みたいな何かと、巴さんの声。考えるより早くそれを掴むと、蔦は私の腕に絡みつき、「うひゃあああああ！？」出口目掛けて、おもいっきり私をぶん投げました！
「ナイスパスッ！」
出口まですっ飛んだところで、赤い人が私をキャッチしてくれました。見滝原中学では3年次に職業体験があるそうですが、一足先にボールを職業体験することになるとは夢にも思いませんでした。母なら出てきたんですけどね。
「ほら、さっさと逃げな！」
そう言って私を地面に下ろす赤い人。口調は少し乱暴ですが、下ろし方は丁寧でした。
「逃げろって……赤い人さんはどうするんですか？」
「……それ、あたしのことか？」
「？　他にも赤い人がいらっしゃるんですか？」
「いや、いねーけどさ。なんか他になかったのか……？」
「じゃあ絶壁さん」
「お前よりはあるわ！！」
……返す言葉もございません。
「もちろん、戦うのよ。それが私たち魔法少女の宿命だから」

逸れつつあった話題を巴さんが戻します。戦う……あの大量の、魔獣と。
「……平気、なんですか？」
「当たり前だ。あたしらはあんなのにやられるほどヤワじゃねぇ」
「パパッと終わらせちゃうわね、築地さん」
２人はそう言って微笑み、黒の大群と対峙します。そして……

戦いが始まりました。

「……本当に、大丈夫なんでしょうか……」
「殺されることはないと思うよ。マミも杏子もベテランだからね」
再び私の疑問に答えるぬいぐるみさん。張り付けたような表情が不気味です。
「ただしあの数だ。ひょっとしたら力尽きて消滅してしまうかもしれないね」
「しょう……めつ……っ！？」
「そうさ。彼女たちの魔力の源であり、彼女たち自身でもあるソウルジェムは、魔法を使うたびに濁っていく。そしてその濁りがソウルジェムを黒く染めるとき、魔法少女は消えてしまうのさ」
「そんな……っ！助けてあげないんですか！？」
せっかく巴さんと友達になれたのに……赤い人にも、まだお礼を言ってないのに！
「無理だね、僕の力の及ぶところじゃないよ。そもそも、力尽きた魔法少女がなぜ消滅するのかもわかってないんだから」
僕に彼女たちは助けられない――――ただし。

「君にはその力がある」

……。
え？

「どういう……ことですか？」
「君には魔法少女の素質があるってことだよ」
あの2人を助けることのできる力をもっている。ぬいぐるみさんはそう言って、張り付けたような笑顔を私に向けます。
「本当……ですか？」
「やめろ！耳を貸すなっ！」
ぬいぐるみさんとの会話を聞いていたらしく、赤い人が戦いながら私に向かって叫びます。
「奇跡はタダじゃねーんだ、希望を求めた祈りは呪いとして自分に返ってくるんだ！他人のために祈って消えてった馬鹿をあたしは知っている！」
その馬鹿な人は、赤い人の大切な人だったのでしょう。赤い人は切々と、魔法少女になることの危険性を私に語ります。
「奇跡がタダじゃないというのはそのとおりだ。そこにもう1つ加えておくと、魔法少女になるには体から魂を抜き取ってソウルジェムに変えなければならない。杏子はゾンビって言っていたかな。人間をやめて、魔獣との戦いの運命に投げ込まれ、最期は消滅する。その代わり、僕が1つだけ君の願いを叶えてあげられる。これらが魔法少女になるメリットとデメリットだ」
それでも良ければ―――
「僕と契約して、魔法少女になってよ！」
「……私……「やめろっつってんだろ！！」
ぬいぐるみさんに返答を返そうとしたら、赤い人の悲鳴にも似た叫びがそれをかき消してしまいました。
「舐めんなよ……魔法少女はお遊びじゃねーんだ。命を危険に晒すってのはな、そうするしか他に仕方ないヤツだけがやることだ！幸せ家族に囲まれて何の不自由もなく暮らしてる奴が一時の義侠心で魔法少女になろうなんざあたしが許さない！」
そういえば、魔法少女になれば願いを1つ叶えるってぬいぐるみさんが言ってました。赤い人は―――何を願ったのでしょう。命を

危険に晒してでも叶えたい願いだったのでしょうか。あるいは、命を危険に晒したことを後悔するような願い――――だったのでしょうか。
けど、赤い人に背負うものがあるように、私にも譲れないものがあります。

「なら私は、自分のために祈って魔法少女になります。それならいいですよね？」

「……勝手にしろ……っ！」
忠告を聞き入れない私に失望したのでしょうか、赤い人は悔しげに吐き捨てます。
「それに、私の幸せ家族は先日他界しちゃいましたから」
赤い人に、私の呟きは聞こえたでしょうか。今はそれより考えなければならないことがあるので、そっちに集中しましょう。
「先に言っておくと、死んだ人間を生き返らせることは君の魔力では不可能だよ。一時的に魂を呼び戻すことが限界だ」
……じゃあ私、特に願い事ないんですけど。他人のためには祈らないって、さっき赤い人と約束しちゃいましたし。
「そのお願いって、後回しは出来ないんですか？」
「祈りを叶えるのは魔法少女になる見返りであると同時に、君の魔法の性質を決定する意味もある。後回しになんて出来ないよ」
「うーん……」
魔法少女、めんどくさいですねぇ……。転校手続きの次くらいにめんどくさいです。
「あっ、そうだ」
1個だけありました。ついさっき、私自身が自分の意思で望んだ願いが。

「また後で私の願いを叶えて下さい」

「……まさか、それが君の祈りかい？」
ぬいぐるみさんが、心底呆れたような顔でそう聞いてきます。別にいいじゃないですか！何心からの呆れ顔を披露してるんですか、張り付けたような表情があなたの持ち味でしょう！
「……まあ、別にいいけどね。一応契約は成立だ」
ぬいぐるみさんがそう言うと、光が私の体を包み、純白の宝石が現れます。……本当にどうでもいいですけど、締まらない契約ですねぇ……『一応』ってなんですか『一応』って！
とりあえずこれで、私も戦う力を得たわけですね。これであの２人にお力添えできます。
「さあ、受け入れるといい」
浮かび上がった宝石……『ソウルジェム』を手に取り、手に入れた力を解放します。

「それが君の運命だ」

「……変！身ッ！！」
……これ仮面ライダーでしたっけ？まぁいいじゃないですか、今日は無礼講です。

魔法少女・築地　毬音の初陣ですから。

あと何回死んだら（前書き）

「やー「久々に気分いいわぁ
「爽快爽快ーっ」

「さやかちゃんは「魔法少女になって…怖くないの？」

「ん、まあそりゃちょっとは怖いけど
「でも「■■■と仁美、二人とも亡くしてたかもしれないって方がよっぽど怖いじゃん
「だ　か　ら　さっ！
「あたしは後悔してない！「これからの見滝原市の平和はこの魔法少女さやかちゃんがガンガン護りまくっちゃいますよー！「なんてね！
「…まあひとつ後悔があるとすれば「もっと早くに心を決めなかったってことかな……
「あたしが早く魔法少女になってたら「マミさんだって死なずに済んだかもしれない…ってね」

「……「わたしこそあの時に…」

「こーゆうのはね、なっちゃった後だから言えるの！」

「！」

「あたしはさ、命懸けでも叶えたい願いがあったんだよ「なるべくして魔法少女になったわけ

「だから■■■が引け目を感じる必要ないの！」

「……うん…」

公式コミカライズ『魔法少女まどか☆マギカ』2巻第5話より　一部修正

あと何回死んだら

◇　佐倉　杏子

ただただ、白かった。

無垢な心を纏ったかのように、無知の衣を羽織ったようなその衣装は、白を基調とした和服らしきデザイン。両手には同じく白をメインに配色された籠手が装備されている。

「……ってまさかの近接戦闘装備です！？」

変身を終えたそいつ（　マミは築地って呼んでたっけか？　）は平和ボケした声で、そんな間抜けな悲鳴を上げた。

「マジですかー……？私今まで喧嘩とかしたことないんですけど……」

「戦うって言い出したのはアンタだろ？」

「いやまぁそうなんですけど……これ、ファイアとかブリザドとか使えないんですかね……？」

何のことか知らねーけど無理だろ。

「えぇ～……まさかの前衛ですか……。魔法少女って言うから、てっきりビームとか光線とかで戦うのかと思ってましたのに……」

あたしはさっきから槍で戦ってるわけだが。

「巴さんみたいに華やかな後衛になりたかったですけど、自分の意思で魔法少女になったわけですから仕方ありません。前衛で泥臭く戦うとしましょう」

喧嘩売ってんのかテメェ！！

ぶつくさ文句を垂れる築地に、マミが諭すように声をかける。

「そんな風に言わないの。戦ってる佐倉さん、かっこよかったでしょ？」
「それはまぁ、確かに……」
「……何だよ、上げたり落としたり……」
なんつーか、調子狂うな……。今が魔獣との戦闘中だってことを忘れそうになる。
「気ぃ引き締めろよ築地！浮かれてっと頭から喰われるぞ！」
「は、はいぃぃぃ！」
若干怯えた様子で返事をする築地。少し脅し過ぎたか？
「ではっ！いざ参らんです！」
絶対語尾の『です』は要らねーだろ。
間抜けな掛け声とともに駆け出し、築地はすぐ近くの魔獣に飛びかかる。そしていかにもな感じの慣れない様子で、魔獣に攻撃する！
「うりゃりゃりゃりゃりゃ！」
「何バカ正直に攻撃してやがる！魔法を使って———」

埋まった。

子どもみてーな攻撃を繰り返していたあいつに、複数の魔獣が覆い被さるように襲いかかり、築地の姿はあっという間に魔獣の群れに包まれ見えなくなった。

「築地さんッッッ！！」

マミの悲鳴が辺りに響く。助けに行きたいが、マミもあたしも自分に群がる魔獣を相手取るのに手一杯だ……！
「ソウルジェムを守れッ！！必ず助けに行く！！」
あたしらが魔法少女になるときに魂を抜き出しソウルジェムに変

えられるのは、平たく言えば殺されても死なないようになるためだ。
例え生命が死んでも、精神が生きていれば魔力で修理出来る。ソウルジェムさえ砕かれなければ、魔法少女は何度でも蘇る……だからあたしはこの体を『ゾンビ』と呼んで卑下していたけど、今はその事実が唯一の拠り所だ。
ソウルジェムだけでも守ってくれりゃ、あいつは生き残れるという事実が。
「……築地さんから離れなさい！ティロ・フィナーレッ！」
マミの決め技、ティロ・フィナーレ。巨大な銃から打ち出された軌跡は、築地に群がっていた魔獣の大部分を削り取ったが……
「避けろマミッ！！」
「あ……」
その間に、もともとマミが相手をしていた魔獣が襲いかかる！
「マミィィィィィ！！」
「巴さんッ！！」
……あ？
聞き間違いじゃない……今の声は……！？
「……！？築地さ———」
マミも目の前の光景が信じられなかったんだろう。何の抵抗もなく築地に突き飛ばされ、しりもちをついている。
そしてマミを突き飛ばした張本人は。魔獣の一撃をモロに食らって吹っ飛んだ。

「つ……築地さん！」
慌てて駆け寄り、心配そうに築地の体を揺するマミ。あたしも相手していた魔獣から距離をとり、築地の様子を見る。
心配だったからではなく、信じられなかったからだ。
いくら魔力で修復できるとは言っても、それにはそれなりの時間がかかるハズだ。
なのにこいつの体には、マミを庇ったときに受けた傷以外が見当たらないのだ。さやかのような、癒しの祈りによる超速再生するタイプの魔法なのか……？
あたしの仮説は、しかし次の瞬間に覆された。
「あー痛い……魔獣の皆さんは人のこと殺し過ぎですよ」

忽然と。

まるで、ダメージを受けたという事実そのものが消失してしまったかのように忽然と。
築地の怪我は消えて、元通りになった。
「だ……大丈夫なの？築地さん」
「あ、はい！全然マッタク問題のーぷろぐれむです！」
心配そうに訪ねるマミに、にこやかに返す築地。頭は全然大丈夫じゃなさそうだ。
「ちょうどいい感じの一撃でしたし、これならこの魔獣さんも倒せますかね」
そう続けると、さっきマミを攻撃した魔獣に向かっていき、また素人らしくぎこちない拳撃を繰り出す……が。

築地の拳撃が命中した箇所に風穴が空き、魔獣は霧散した。
「どういうことだ……！？お前の攻撃、さっきはノーダメージだったじゃねーかよ！？」
わけがわからない……こいつの魔法は一体何なんだ！？
あたしやマミの混乱をよそに、築地は残る魔獣の群れに視線を向けて、げんなりした様子で呟いた。
「はぁ……あと何回死んだら、あれ全部倒せるんですかね……」

◇　築地　毬音

「マミィィィィ！！」
赤い人の、慟哭にも似た叫びが響きます。
まずいです……私が余計な心配をかけてしまったばっかりに、巴さんが大ピンチです！
巴さんのおかげで大部分の魔獣さんは消し飛びましたので、残った魔獣さんは私の魔法でダメージを植え付けます。
あれだけの魔獣さんにあれだけの回数殺された（　あくまで攻撃されていただけなんですけど、体感的には殺されるのと大差ありません。すっごく恐いんですよ！？　）甲斐あって、私の周りの魔獣さんは一瞬で消し飛びました。
「巴さん！！」
私の運動神経では間に合いません。魔力で自己修復が出来るのなら、魔力で身体能力を強化するとか出来ないのでしょうか？
「……！？築地さ――――」
出来ました。
なんとか間に合い、巴さんを突き飛ばした次の瞬間、私の脇腹を

痛みが襲います。痛みっていうか、魔獣さんの攻撃なのですけど。
ハンパなく痛いです。
「つ……築地さん！」
巴さんが駆け寄ってきて、心配そうに私の体をゆすります。
そんな巴さんの様子が不謹慎ながらとても嬉しかったのですが、やっぱり傷口の痛みがぱないですし、嬉しいからといって心配をかけ続けるのもいただけません。
「あー痛い……魔獣の皆さんは人のこと殺し過ぎですよ」
素直に『大丈夫ですよ』と言って立ち上がれなかった友達耐性の低い私は、ひとまずダメージを『貯蓄』して怪我を治し（ 治すと言うより戻すと言った方が正確かもです ）、大丈夫ですアピールをすることにします。
「だ……大丈夫なの？築地さん」
「あ、はい！全然マッタク問題のーぷろぐれむです！」
通じませんでした。
結局素直に『大丈夫ですよ』って言うより恥ずかしい思いをすることになってしまいました……。
『ぷろぐれむ』？『ぷろぶれむ』？
「ちょうどいい感じの一撃でしたし、これならこの魔獣さんも倒せますかね」
照れ隠しの意味も含めて（ というかそれ一色で ）さっき巴さんを狙い私を攻撃した魔獣さんに向き合います。
とはいえ、あのダメージをそのまま再現するだけじゃさすがに倒せないですし……『あのダメージを生み出す攻撃力』と魔力による『腕力強化』を合わせて攻撃すればいけるでしょうか？
まずは『貯蓄』したダメージを使って、そのダメージを与えるだけの攻撃力を右手に設定します。続いて魔獣さんに向かって駆け出し、ついさっき学んだ魔力による身体能力強化で右手の攻撃力を強化、あとは殴るだけです。

ドーピングの限りを尽くした一撃は、容易く魔獣さんのお腹に穴を空けて霧散させました。

「どういうことだ……！？お前の攻撃、さっきはノーダメージだったじゃねーかよ！？」

驚愕に満ちた赤い人の声が聞こえましたけど、とりあえずその疑問に答えてる時間はなさそうです。

目の前で蠢く魔獣さんの群れを見ながら、私は愚痴混じりに呟きを溢しました。

「はぁ……あと何回死んだら、あれ全部倒せるんですかね……」

やっぱ真剣に願い事決めとけば良かったです。まさかこんな不便な魔法に当たるなんて……。

攻撃するために攻撃を喰らいにいくとか、端から見たら変態です。ドドMさんだと思われてしまいます。それは違います不名誉極まりありません、私はノーマルです！

「築地さん、あなたの魔法って、どういう種類のどんな魔法なの？」

「いやあの、説明したいんですけど、なんかややこしい魔法でして……。説明する時間は無さげかなーとか……」

あんまりのんびりしてると、また魔獣さんに殺されますし（繰り返しになりますけど、あくまでも体感の話ですよ？）。

「じゃあかいつまんで説明してくれ。もし『受けたダメージを跳ね返す』みたいな魔法なら、危険過ぎてあんたを戦闘には参加させられない。」

魔獣さんたちを見据えながらそう言う赤い人。彼女が言っているのは多分、素人の私があれだけの数の魔獣さんを相手に、ソウルジェムへの攻撃だけを避けて攻撃を受け続けるのは難しいということでしょう（ちなみに私のソウルジェムは右肩のところです）。

そういうリスクの高い魔法なら、戦線から離脱させる。赤い人はそう言っているのです。

うーん、ちゃんと説明しないと戦いに参加させてもらえない感じ

ですねぇ……。かといって要約して伝えるなんて高等技術、私には使えませんし……あ、いいこと思いつきました。

そういえば私の魔法は、その気になればなんだってできるんですね。

「私の魔法は、例えて言うならハガレンの錬金術みたいなものです」

「「……？」」

また通じませんでした。

ハガレンクラスの漫画なら知ってると思ったんですけど……今どき天然記念物みたいな人達です。

「見境の無い等価交換とでも言いましょうか、何かを対価に捧げれば等価の何かを生み出せる魔法なんです」

言いながら私は屈んで、コンクリートで舗装された道に触れ、説明を続けながら魔法を発動させます。

「例えば、この辺りの地面の『舗装されてからの時間』を対価に捧げるとします」

すると道は『舗装されてからの時間』を失い、コンクリートを被る前の砂利道に戻ります。

「なっ……！？」

「これが……築地さんの魔法！？」

「まぁ、捧げた対価を『貯蓄』すればこれで終わりなんですけど、今回はそうですね……『魔獣さんの時間のみが動かない時間』を創りましょうか」

そう言って再度魔法を発動させ、先ほど対価に捧げた『時間』と

等価の『時間』が生み出されます。

噛み砕いて言えば、道路の『過去』を対価に魔獣さんの『現在』を停止させる時間帯を創り出したわけです。

「……なんだか、神様みたいな魔法ね……」

完全に動かなくなった魔獣さんの群れを見て、巴さんはそんな風に呟きました。

「怪我を一瞬で治したのも、魔獣に風穴を空けたのも、その魔法なのか？」

「はい――――まぁ怪我については治したと言うより、対価に捧げたから消失したと言うべきなのかもですけど」

「……なんっつーか、おっかねぇ魔法だな」

「恐ろしくなんかないよ、ただ無垢なだけさ」

ここで、今まで静かにしていたぬいぐるみさんが口を開きます。耳から生えてる何かが着けてる輪っかがおしゃれです。

「祈りでも呪いでもなく、希望でも絶望でもなく、聖でも邪でもない。紀元前から数多の魔法を見てきた僕だけど、こんな魔法を見るのは初めてだよ」

前人未到の魔法らしいです。ギネスブックとかに載っけてもらえないでしょうか。

「何にせよ、魔獣さんが止まってる今のうちに倒しちゃいません？魔獣さんだけが動けない時間って自然なものじゃないので、長続きしないはずなんですよ」

そもそも対価に捧げた時間がどれくらいなのかもわからないので、いつ動き出すかわかったものじゃないですし。

「……そうね、せっかく築地さんが作ってくれたチャンスを無駄にしちゃうのも勿体ないし」

「だな！サクッと終わらすか！」
そう言って停止した魔獣さんの群れに歩み寄りながら、それぞれの武器を構える巴さんと赤い人。
幾度となく死線をくぐり抜けてきた2人のベテラン魔法少女の背中は、それを見る私に暖かい安心感を与えてくれる背中でした。

「ティロ・フィナーレ！」

巴さんと赤い人の大技が魔獣さんの群れを覆って炸裂します。
その数瞬後、私の魔法の効力が切れ、魔獣さんたちの時間が動き出すとともに、巴さんたちの攻撃が直撃した事実が黒の軍勢を消滅させます。

「よっしゃ、一丁あがりっ！」
「あ……」

赤い人の一言で、戦いが終わったんだと実感し。
私の初陣は、どうやら勝利で閉幕したらしいという現実が心に馴染むとともに、私の気分が高揚してきます。
そんな私の気持ちを見抜いたのか、巴さんが私に優しく微笑み、声をかけてくれます。

「お疲れ様、築地さん。今日のお茶会は祝勝会に変更しましょうか」

「……！はいっ！」
「お、何だ何だ？もしかしてこれからどっか行くのか？」
「築地さんの初勝利だし、どこかで祝勝会でもって。佐倉さんも一緒に来る？」
「おー、行く行く！祝勝会と並行して、反省会も開かないとな！」

「えぇー！？マジですか！？」
なんか話の雲行きが怪しくなってきました！
「当たり前だろ？あんな危ない戦い方しやがって、みっちり叱ってやるからな！」
「そうね、確かにあんな戦い方を続けられたら私たちの身が持たないものね。お姉さんに心配かける悪い子は、お説教しなくっちゃ！」
「あ、ごめんなさい、唐突に急用が出来ましたので今日はこれで……」
「そんな安い嘘で逃げられると思うのか？」
なんだか意地悪な笑顔を浮かべて私と肩を組む赤い人。
私は救いを求めて巴さんに視線を移しましたが……。
「こういうのは、その日のうちにやるのが一番いいのよ？」
「……あぅ」
四面楚歌。
降伏宣言の代わりに、肩を落とします。
それを合図に、赤い人はにかっと笑って私の肩を叩きます。
「よしっ、んじゃ行くか！マミん家でいいよな？」
「構わないけど……食事の用意は一人分しかないわよ？」
「えぇーっ！なんだよ、ついでに今日の晩飯と明日の朝飯食わしてもらおうと思ってたのに！」
「『ついで』のほうがメインみたいなボリュームです！？」
「ていうか朝って……まさかうちに泊まるつもりだったの？」
「まぁいいじゃんか、一応祝勝会でもあるんだし！ほむらの奴も呼んで騒ごうぜ！」
「そうね……たまには、みんなで集まって、賑やかに過ごしましょうか！」
「『ほむら』って……まさか、暁美さんも魔法少女なんですか！？」
「よし決定ー！キュゥべえ、ほむらは今どこにいるんだ？」
「そうなると、食材をもっと買い込んでおかないと……うぅ、この出費は痛いわね……」

「あ、じゃあ会費として私も半分出します！」
「あの辺か……結構近いな。よし、このままほむらを拾ってこうぜ！」
「そういえば、まだちゃんと自己紹介してませんでしたね。私は築地　毬音です！」
「佐倉　杏子だ。よろしくな、毬音」

1人だと寂しい帰り道も、3人いると騒がしい。

そんな当たり前のことに気付いた、転校初日の放課後でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2755z/

魔法少女まりね☆マギカ

2012年1月6日14時49分発行